醒井　岩根よりわき出る水也、東より南へ流たり、石地藏、水の中にたち給也、此井をさめが井といふことは、むかし日本武のみこと、東夷征罰し給ひし比、當國伊吹の山に入給ひしに、伊吹大明神大蛇と現じ、道の中にわだかまりしを、尊とびこへ給ふとて、御足すこし大蛇のひれにあたり、それよりいたはり給ひ、大ねつきさしけるを、道のほとりにありける清水に、御足をひたし給へば、そのまゝねつきさめけりとなん、さてこそ此石はありけるといへり、

汲て知人しもあらば醒井の清き心をあはれとやみん

梓川（アヅサガハ）　伊吹山つゞき也、梓山と云の麓を流るゝ川也、此川原を過れば、美濃の不破の關也、

筑摩　坂田郡の内也、明神の社あり、緣記草創、神社の所に有之、此神は女の男をいのるに、四月朔日の祭の日、すてられし男のかず鍋をかぶりてまいり、またの男をいのり侍るとは傳る也、拾遺戀のうたに、

近江なる筑摩の祭とくせなんつれなき人の鍋のかずみん

水茎ノ岡

水くきの岡の淺茅のきりぐ〳〵す霜のふりはぱや夜寒成らん

〔書言字考節用集十數量〕近江八景　唐崎夜雨、石山秋月、三井晚鐘、矢橋歸帆、粟津晴嵐、勢多夕照、比良暮雪、堅田落雁、

〔輿佐久間洞巖書〕八景の始は、宋人か元人か宋復古と申す名畫、山水に妙を得たるが一軸を畫かれ候を、凡一代の出來物に候を、人々その興ある處に名を題し、終に八ツの名出來候と申候、これによりて八つの名そろひかね候所とも、畫樣に隨ひ候故のこと、申候、これより好事の人、詩をも題咏し候き、それを又八ツとし候ことは、沈約が八詠樓に倣ひ候とも申し、李太白金華開八景と申す一句により候共申候が、本邦にてわけてとりはやし候は、東山公方の御物に、玉澗が八景候故と聞え候、されどこなたの景をそれに擬し候事になり候ひしは、慶長元和